戦史資料にみる海軍飛行場と陸軍中飛行場の利用

山口直美、久貝弥嗣

はじめに

太平洋戦争時、宮古島市内には、海軍飛行場、陸軍中飛行場、陸軍西飛行場という 3 つの飛行場が建設された(注 1)。宮古島に 3 つもの飛行場が建設された理由として、下地和宏は以下のようにまとめている。「瀬名波栄は『先島群島作戦(宮古編)』で、宮古島は「島全体が平坦で起伏に乏しく、航空基地としては最適であると判断」した第三二軍は、「南方との中継基地としての海軍飛行場」を建設することにしたという。また、『宮古島戦記』では、「この飛行場〔陸軍中・西〕は沖縄作戦の特攻基地として高度の使命を果たした。」とも述べている。また、瀬名波によれば、海軍飛行場は「南方との中継基地」、陸軍飛行場は「特攻基地」としての機能・性格を有していたと見ている。」(下地 2017)

これらの飛行場の構築にあたっては、地元の住民も多くかり出され、飛行場が敵の空爆の対象にされることも多かったことから、これらの体験談が聞き取り調査で多くえられている。その一方で、戦時下において各飛行場が具体的にどのようにして利用されていたかを紹介する資料は少ない。後述するように、海軍飛行場からは、第 3 龍虎隊の 7 人、陸軍中飛行場からは、誠 114 飛行隊、誠 116 飛行隊の 10 人が特攻隊として出撃、散華している。

宮古島市二重越には、太平洋戦争で駐屯した各部隊戦没者の慰霊碑が建ちならんでいるが、その中には、神風特別攻撃隊第 3 龍虎隊の慰霊碑もある。この慰霊碑は前述した第 3 龍虎隊関係の慰霊碑である。2015 年には、直木賞作家の古川薫氏が、この龍虎隊を題材とした小説『君死に給ふことなかれ』(幻冬舎)を発表し、宮古島市内でも新聞報道されるなど話題となった。

前述した 3 つの飛行場の内、陸軍西飛行場については、正面に来間島がひかえていることから、ほぼ利用されることがなかった。本稿では、海軍飛行場と陸軍中飛行場の利用状態を戦史資料からひも解くことをテーマとしており、国立アジア歴史資料センターに公開されている航空隊に関する戦史資料を中心としながら、海軍飛行場と陸軍中飛行場の利用状況について整理した。これらの整理作業を通しての目的は、沖縄戦時下における宮古の状況を考える重要な要素の一つである飛行場の利用実態を明らかにすることにより、過去の戦争に向き合い、平和を考えるための資料とすることにある。

なお、本論で記述した ref 番号は、国立アジア歴史資料センターで整理されている資料番号を示すものである。

１．海軍飛行場

(1)海軍飛行場の概要

海軍飛行場の設営は、1943(昭和 18)年 9 月から、平良町東部の三部落七原、屋原、越地の所有者 255 人、約 175 ㌶の農耕地の強制接収を開始し、翌年の 5 月までに建設が行われている。海軍飛行場は、現在の宮古空港滑走路の原型ともなった飛行場である。

海軍飛行場の主滑走路は、北東から南西へ 1400m、風向も配慮した副滑走路は、東西 1200m、南北 1300m の 2 本で、誘導路は延長 6km にもおよぶ。航空写真をもとに作成されたアメリカ軍の宮古島の地図の中には、誘導路に沿って 32 の掩体壕と思われるがコの字形の施設が見て取れる。掩体壕については、後述する陸軍中飛行場での聞き取り調査の中で、土を盛った二つのマウンドの間に飛行機を格納する無蓋式の掩体壕や、御嶽などの雑木林の中に飛行機を秘匿したとの聞き取りがえられている。

海軍飛行場に関連する戦争遺跡として海軍 313 設営隊の地下壕群がある(写真 1、2)。 現在の宮古島熱帯植物園から青少年の家の丘陵部に総数 34 基が確認されている。

海軍飛行場に近接する海軍関連の戦争遺跡としては、前述した海軍 313 設営隊の地下壕群のほか、海軍飛行場砲台、二重越の地下壕群の 2 つがある。

『先島群島作戦(宮古篇)』では、海軍飛行場の東側に砲台のマークが記されており、二十糎榴弾砲を 2 門設置したと記されている(注 2)。海軍に関連する砲台は、全体で 6 つあったとされるが、本海軍飛行場砲台と、平良砲台については、その痕跡を全く確認することができない。聞き取り調査から、この砲台は、二重越崖上にある浄水場近くに大砲が設置されていたとされる(沖埋文 2005)。海軍 313 設営隊は、広島の呉を出発し、昭和 19 年 9 月 14 日に宮古島に上陸している。部隊は総数 650 名からなる。海軍飛行場の砲台の構築にあたっては、高橋中尉を小隊長とする海軍 313 設営隊第 3 中隊第 1 小隊があたっている。

もう一つ、海軍飛行場の滑走路の北東側には、二重越の丘陵が位置している。二重越の丘陵部からは、これまで 35 の壕が確認されており。海軍警備隊の本部がおかれたと考えられている。この壕群は、古墓を利用した簡易な造りの壕も複数みられるが、コンクリート造りで、碍子が多く散乱している発電機施設との関連性が想定される壕(写真 3)や、五つの壕口が連結した非常に大規模な壕(写真 4)も確認されていることから、非常に大規模な部隊がこの丘陵に駐屯していた状況がみてとれる。同じ丘陵地の市民球場の遊歩道沿いには、北台湾海軍航空隊の慰霊碑も建立されている(図版 1)。

写真 1　海軍 313 設営隊の地下壕群

写真 2　海軍 313 設営隊の地下壕群

写真 3　二重越の地下壕群

写真 4　二重越の地下壕群

北台湾海軍航空隊宮古島派遣隊
戦没者英霊に捧ぐ

我等昭和十九年七月
西南諸島海軍航空隊宮古島派遣隊として
宮古島に駐留
沖縄本体玉砕後北台湾海軍航空隊に転属
昭和二十年八月十五日迄同島防衛に当る
この間米英軍の銃爆撃艦砲射撃或は劣悪なる
食料事情等により幾多戦友の貴い生命を失う
同隊現存の有志今ここに非剣に倒れし戦没
戦友の霊を慰めんとしこのゆかりの地にこの
碑を建立す　昭和二十年十月二十三日復員後
幾星霜の遅きに失したるを深謝し改めてそ
の冥福を祈る心切なり
安らかに眠らんことを願う

昭和五十五年五月四日
北台湾海軍航空隊宮古島派遣隊
現存有志一同

図版 1　北台湾海軍航空宮古島派遣隊の慰霊碑及び慰霊碑の全文

(2) 特攻隊の出撃

昭和 20 年 2 月以降、宮古島への空襲は定期的になり、海軍飛行場の滑走路は連日空爆を受け、その為に発生した弾薬跡の埋め戻し作業が連日のように行われている。この作業に従事した海軍第 313 設営隊第 2 中隊第 1 小隊(小隊長大下茂樹)の高橋彰の手記には、海軍飛行場について次のように記されている。「深夜遅く飛来してきた特攻機を安全に着陸させるため、民家の爆風避けである珊瑚礁の石垣の石を弾痕跡の埋め込みに使用した。4 月 1 日、米軍の沖縄上陸後は宮古島も防衛の最前線となり、台湾からの零戦特攻機が沖縄の戦闘で破損して宮古島に着陸することも度々あった。航空隊は、飛行機がなくなり、九三式中間練習機(赤とんぼ)に 25kg の爆弾を搭載して滑走路を離陸していくこともあった。昭和 20 年 5 月初旬から 6 月下旬まで、毎日 20：00 頃から深夜まで滑走路補修作業に加わった。」(海軍第 313 設営隊第 2 中隊第 1 小隊分隊士　高橋彰手記より)

また、海軍第 313 設営隊主計長海堀洋平大尉の手記にも「終戦の 2 か月前、25kg 爆弾を搭載した赤とんぼと言われていた練習機 8 機を見送った」と記されている。

これらの資料にもみられるように宮古島の海軍飛行場は、台湾を拠点とする第 132 海軍航空中練隊(龍虎隊)の特別攻撃の中継地として利用されている。また、第 205 飛行航空隊(大義隊)も台湾を拠点とし、石垣島の飛行場を中継地として宮古島近海に特別攻撃隊として出撃している。そのため、不時着などで海軍飛行場を利用したことも多い。以下、この 2 つの部隊に関する資料の整理を行っていきたい。

①第 132 海軍航空中練隊(龍虎隊)

a. 戦史資料

第 1～3 龍虎隊の内、戦史資料が確認できるのは、第 2 龍虎隊のみである(ref. C13120010700)。以下、その内容について概略してみたい。

イ．攻撃目標　敵輸送船・駆逐艦・巡洋艦

ロ．航路(進出)　虎尾基地―宜蘭基地―石垣基地―宮古基地

ハ．攻撃要領　宮古基地進出後宮古基地指揮官の指揮に依り機を見て夜間特攻攻撃

ニ．兵力・兵装

兵力…九三式陸中練 8 機(他 21 機予備機)

兵装…25 番通常爆弾

ホ．編成　1 区隊 4 機　2 区隊 4 機

1 区隊…辻口静夫上飛曹・古長安雄一飛曹・庵民雄一飛曹・花上孝二飛曹

2 区隊…三原泰宜一飛曹・永田正司二飛曹・赤崎正治一飛曹・及川奥平一飛曹

ヘ．其の他　各燃料増槽装備攻撃発進時満載す

表１　第２龍虎隊の出撃状況

月日時	発進基地	着基地	記事
5.17			5FGB 電作 125 號により中連隊の慶良間泊地敵艦船特攻攻撃発動せらる
5.24　20:19			5FGB 電令第 132 號により中連隊第 2 龍虎隊出撃を発動せらる
5.28　17:30	虎尾		第 2 龍虎隊 9 機(内 1 機予備機)発進
5.28　19:20		宜蘭	進出機着
6.1　17:30	宜蘭		天候不良の為 5 月 28 日以降宜蘭に於て待機せる処天候恢復に伴い石垣に向け進出機 8 機
6.1　19:30		與那国島	宜蘭の 105 度 50 浬の洋上に於て「スコール」に突入発動機不調の爲與那国島に不時着 7 機大破(辻口・古長・及川・赤崎・三原・花川・庵機)
6.1　20:15		石垣	永田機 1 機分離與那国島に至る迄及同島通過後前後 2 回に亘り「スコール」に突入せるもこれを突破し着
6.9　19:00	石垣		永田機 1 機宮古に向け石垣基地発進直後燃料ポンプ故障不時着機体大破
6.9　19:00	石垣	虎尾	永田二飛曽陸輸使にて虎尾基地帰隊
6.20　18:00	與那国		第二龍虎隊與那国島不時着搭乗員 7 名陸軍徴用船に便乗蘇澳に向け発
6.21　08:00		蘇澳	第二龍虎隊 7 名着
6.24　08:00		虎尾	第二龍虎隊員 7 名虎尾基地着解隊

本資料を見る限り、第 2 龍虎隊の 8 機全機がスコールや燃料ポンプの故障などにより與那国島や石垣島へ不時着し、大破している。第 1 龍虎隊においても、夜間飛行などの影響により、全機が不時着した結果、大破している。

このような状況をふまえ、第 3 龍虎隊においては、1 カ月間にわたり夜間飛行などの訓練を行っている。昭和 20 年 7 月 29 日、三村弘海軍上等兵以下 7 名が、海軍飛行場より出撃している。出撃した 7 機の内 2 機は故障で引き返し、翌日再度出撃している。特攻機は九三式

第１図　沖縄特攻によるアメリカ艦船の沈没と損傷(7 月 28～29 日)

※『フォトドキュメント特攻と沖縄戦の真実』より

中間練習機(赤とんぼ)が使用され、250kg 爆弾を搭載している。通常は、最高速度 21km/h だが、爆弾搭載の為 130km/h の速度と考えられている。

7 月 29 日に出撃したのは、三村弘上飛曹、庵民雄一飛曹、佐原正二郎一飛曹、近藤清忠一飛曹、原優一飛曹の 5 名で、この時の特攻攻撃によって、駆逐艦キャラハンが沈没(戦死 47 名)、その他、駆逐艦ブリチェットが損傷している。明けて 30 日、前日故障で引き返した 2 機が沖縄周辺洋上に出撃し散華。駆逐艦キャッシング・ヤング、高速輸送艦ホーレス・Ａ・バスが損傷を受ける。この 2 機の搭乗者は松田昇三一飛曹と川平誠一飛曹である。これらの特攻攻撃を行った場所については、『第 2 次大戦米国海軍作戦年誌』から、駆逐艦キャラハンが北緯 25 度 43 分、東経 126 度 42 分で沈没、駆逐艦ブリチェットが北緯 25 度 43 分、東経 126 度 56 分で損傷、駆逐艦キャッシング・ヤングが北緯 26 度 03 分、東経 127 度 58 分で損傷、高速輸送艦ホーレス・Ａ・バスが、北緯 26 度 17 分、東経 127 度 34 分で損傷したことが確認される。

b. 沖縄方面海軍作戦　戦史叢書　17（12）（Ｐ590）

前述した『第 2 次大戦米国海軍作戦年誌』での被害状況に関連して、本資料には、第 3 龍虎隊出撃状況が記されている。

7 月 29 日

中練 8 機…0130～0200 宮古発　嘉手納沖艦船攻撃(内引き返し 4)(未帰還 4)　不詳 3 沈

(布告 259)　※中練は九三式中間練習機を示すと考えられる。

7 月 30 日

中練 3 機…0230～0330 発　沖縄周辺艦船攻撃　(未帰還 3)不詳 1 撃沈又は大破

(沖縄方面海軍作戦　戦史叢書　17)(布告 259)

②第 205 海軍航空隊

『先島群島作戦(宮古篇)』や海軍 313 設営隊の士官の手記等には、日中の爆撃を受けた後、特攻機の飛来あるいは誘導機、偵察機の離着陸の為、夜間に滑走路の修復をしたことが記されている。このことから、第 3 龍虎隊の他にも特攻機が飛来していた可能性はある。それを裏付ける資料として第 205 海軍航空隊による戦闘詳報が確認される。以下、各戦闘詳報の内容について整理していきたい。

a. 昭和 20 年 4 月 1 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 4 號

昭和 20 年 4 月 1 日天一號作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊新竹隊

(ref.C13120288200)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 4 号天一号作戦（沖縄敵機動部隊攻撃）として角田少尉を指揮官に出撃。直掩及び戦果確認機零戦 4 機。4 月 1 日新竹基地を発進したもの、彗星 1 機、零戦 1 機、石垣南にて F6F4 機発見、低空避退宮古島に引き返す。不時着 F6F8 機の銃撃を受け零戦炎上

b. 昭和 20 年 4 月 3 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 5 號

昭和 20 年 4 月 3 日天一號作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊新竹派遣隊

(ref.C13120288900)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 4 号天一号作戦(沖縄敵機動部隊攻撃)として角田少尉を指揮官に出撃。直掩及び戦果確認機零戦 4 機新竹基地発進。彗星 1 機 1 番機より敵空母突入の入電有。

c. 昭和 20 年 4 月 28 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 8 號

昭和 20 年 4 月 28 日第一次櫻作戦（沖縄敵機動隊攻撃）　第 205 海軍航空隊（宜蘭基地）

(ref.C13120290900)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 8 号第一次桜作戦（沖縄敵機動部隊攻撃）によると、宮古島南東方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、直掩隊零戦 2 機、攻撃機 1 区隊零戦 4 機、2 区隊零戦 4 機で宜蘭基地発進。1 区隊の 1 機爆音不調のとなり、宮古基地に向かい、宮古

基地に不時着。2 区隊の 2 機、敵発見できず、宮古基地不時着。残りの 2 機は石垣基地着。

d. 昭和 20 年 5 月 4 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 9 號の 1

昭和 20 年 5 月 4 日第一次櫻作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊(宜蘭基地)

(ref.C13120291600)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 9 号の 1 第二次作戦(敵機動部隊攻撃)によると宮古島南方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、第一次零戦 5 機(直掩 1)、第二次零戦 4 機、第三次零戦 3 機、第四次零戦 6 機(直掩 1)で宜蘭基地発進。敵空母 2 隻撃沈、1 隻炎上停止。被害は 3 機。

e. 昭和 20 年 5 月 4 日　　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 9 號の 2

昭和 20 年 5 月 4 日第一次櫻作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊(石垣基地)

(ref.C13120292200)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 9 号の 2 第二次櫻作戦(敵機動部隊攻撃)によると宮古島南方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、第 1 次攻撃零戦 4 機(直掩 2)、第 2 次攻撃零戦 3 機、成果確認零戦 1 機で石垣基地と宜蘭基地発進。

f. 昭和 20 年 5 月 9 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 10 號

昭和 20 年 5 月 9 日第三次櫻作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊(宜蘭基地)

(ref.C13120292900)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 10 号第三次櫻作戦(敵機動部隊攻撃)によると、宮古島南東方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、1 区隊零戦 4 機(直掩 2 機)、2 区隊零戦 5 機(直掩 1 機)で宜蘭基地発進。戦果は中型以上空母 2 隻(確実)あるいは 2 隻撃破。直衛艦〈駆逐艦〉1 隻撃破被害 5 機。

g. 昭和 20 年 5 月 15 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 11 號

昭和 20 年 5 月 15 日第四次櫻作戦（沖縄敵機動隊攻撃）　第 205 海軍航空隊（宜蘭基地）

(ref. C13120293700)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 11 号第四次櫻作戦(敵機動部隊攻撃)によると、沖縄西方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、零戦 4 機(直掩 2 機)で宜蘭基地発進。敵艦発見できず帰還。

h. 昭和 20 年 5 月 18 日　第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 12 號

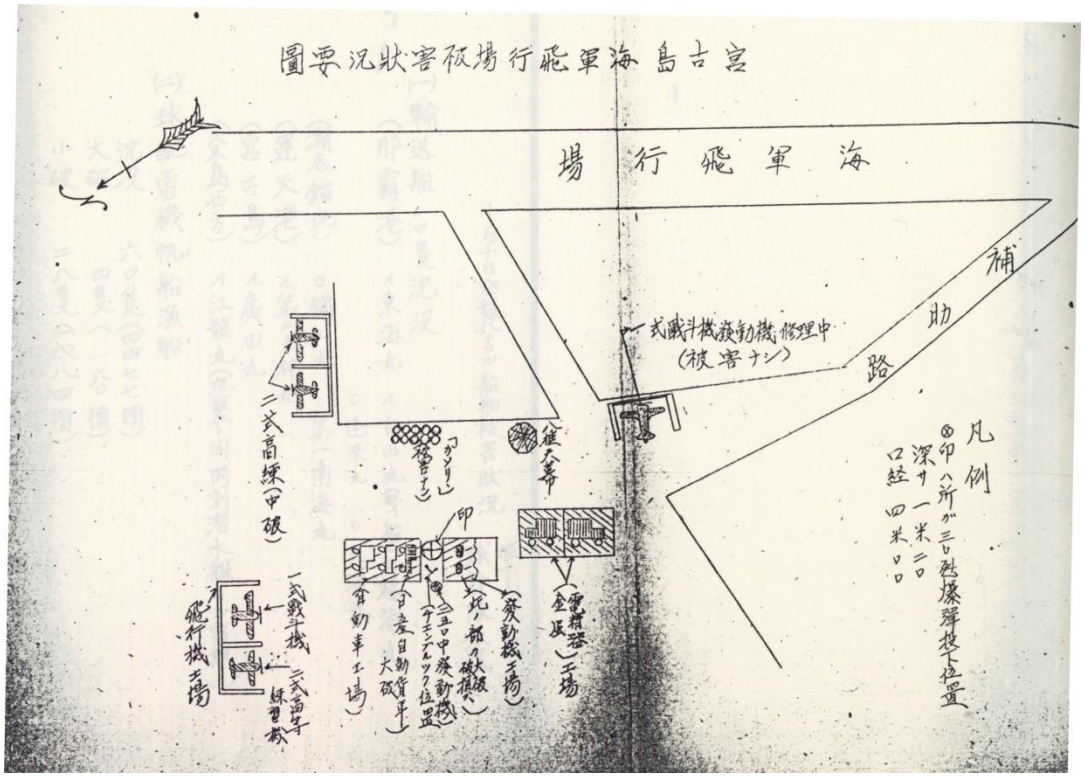
昭和 20 年 5 月 18 日第五次櫻作戦(沖縄敵機動隊攻撃)　第 205 海軍航空隊(宜蘭基地)

(ref.C13120294300)

第 205 海軍航空隊戦闘詳報第 12 号第五次櫻作戦(敵機動部隊攻撃)によると、と宮古島南方海面敵機動部隊特別攻撃を任務とし、1 区隊零戦 4 機(直掩 1 機)、2 区隊零戦 4 機(直

掩 1 機)で宜蘭基地発進。戦果被害なし。

これらの特別攻撃隊の出撃の他には、空襲による被害状況を記した戦史資料も残されている(ref.C11110219100)。この資料は、昭和 19 年 10 月 10 日の空襲(いわゆる十・十空襲)時に海軍飛行場がうけた被害の一部を記した資料である。この資料からは、海軍飛行場内の飛行機工場に二式高練(中級)(注 3)、一式戦闘機(注 4)が格納されているほか、電精器金属工場や、自動車工場、発動機工場などの施設がみてとれるほか、八推天幕が張られてあったり、ガソリンがおかれている状況がみてとれる。このことから、海軍飛行場内に、飛行機の修理を行う施設群がおかれていたことを読み取ることができる。



第 2 図　宮古島海軍飛行場被害状況図(ref.C11110219100 より)

2. 陸軍中飛行場

(1) 陸軍中飛行場の概要

陸軍中飛行場は、字野原の地で、所有者 117 人から約 115 ㌶の土地を接収し、逆八の字型の滑走路 2 本、東側 1700m、西側 1400m、それに 6km の誘導路と 25 の掩体壕が建設された。(『みやこの歴史』より)。陸軍中飛行場の建設にあたっては、第 205 飛行場大隊、要塞建築第 8 中隊が関わっており、陸軍西飛行場と並行して作業が進められ、1944 年 5 月に着工し、

10 月には完成している。

(2)特攻隊について

陸軍中飛行場から出撃した特別攻撃隊として、『沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦 戦史叢書 36(13)』と、知覧特攻平和館提供資料の 2 つを確認することができた。これらの資料から、誠 114 飛行隊と、誠 116 飛行隊の 2 つの部隊が特別攻撃隊として陸軍中飛行場を利用していることがみてとれる。

(2) - 1. 知覧特攻平和館

①誠 114 飛行隊

・昭和 20 年 3 月 20 日　第 8 飛行師団で編成。二式複戦(屠龍(とりゅう))：15 機(内 3 機予備)
12 名

第 3 図　沖縄特攻によるアメリカ艦船の沈没と損傷(4 月 28 日)

※『フォトドキュメント特攻と沖縄戦の真実』より

・隊長　武田光興少佐、原照雄少尉、矢作一郎少尉、井上忠雄軍曹、藤井広馬伍長、伊藤喜三伍長、馬蹄安正伍長、内山栄伍長、大井清三郎伍長、小山少尉、福谷伍長、1 人不明

・昭和 20 年 4 月 1 日 16：00　台湾桃園を出発。宮古島へ前進。(第 8 飛行師団、天一号航空作戦戦闘詳報による。)

・昭和 20 年 4 月 2 日 06：00 頃　直掩隼 3 機と共に(4 機。飛行第 24 戦隊としている資料〔誠部隊天号作戦特攻状況一覧表〕あり)7 機出撃。2 機引き返し、5 機沖縄中飛行場西方海面進撃。1 機(大井清三郎伍長)突入散華。輸送船 1 隻撃沈を報ず。直掩 2 機(須賀機と出雲機)未帰還。

19：00 頃　宮古島から飛行第 24 戦隊 3 機。独立飛行 41 中隊 2 機。独立飛行 49 中隊 1 機の混成の直掩誘導 6 機と共に 9 機出撃し、2 機引き返し、7 機沖縄中飛行場西方海面に進撃し、(竹田少尉隊長、原少尉、矢作少尉、井上軍曹、藤井伍長、伊藤伍長、馬蹄伍長)突入散華。直掩 1 機(坂田機)未帰還。戦艦 1 隻・巡洋艦 2 隻撃沈。不詳艦 1 隻大破炎上を報ず。内山伍長は引き返した桃園で戦死。(昭和 20 年 5 月 9 日 6 時 6 分桃園大園庄三塊暦で誘導機として前進中に戦死。)

・昭和 20 年 4 月 14 日　宮古島へ進出

・昭和 20 年 4 月 22 日　夕方、出撃準備したがとりやめとなる。

・昭和 20 年 5 月 10 日　桃園へ移動。

・昭和 20 年 5 月 15 日　第 8 飛行師団の命令により原隊に復帰。

②誠第 116 飛行隊

・昭和 20 年 4 月中に千葉県の柏において常陸教導飛行師団の飛行第 18 戦隊により編成。97 戦:8 機(内 2 機予備)6 名

・昭和 20 年 3 月 20 日　4 月上旬、台北に展開。第 8 飛行師団直轄。以後、石垣島へ進出し、第 9 飛行団長の指揮下に入る(12 名)。その後、宮古島に移動を開始する。

・昭和 20 年 4 月 8 日　台湾の潮州から屏東南飛行場へ移動。

・昭和 20 年 4 月 28 日　五味大礎少尉と大橋茂伍長の 2 機、宮古島から出撃し、慶良間湾内に突入散華。

・昭和 20 年 5 月 10 日　台湾の北港に移動。

・昭和 20 年 5 月 15 日　第 8 飛行師団の命令により、原隊に復帰。

4 月 28 日戦死者…五味大礎大尉(24 歳)、大橋茂少尉(17 歳)

(注) 昭和 20 年 4 月 2 日未明、沖縄特攻のため直掩の飛行隊第 105 戦隊に続いて離陸したが、直掩機を発見できず、空中集合できないまま飛行場上空を旋回するうち、不時着するもの、着陸時に衝突するもの、飛行場に爆弾が不時落下するもの等が生じ、主力の進攻は中止された。直掩の 2 機のみ沖縄へ進攻。戦果不明。

(2)-2.『沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦 戦史叢書 36(13)』

本資料に記されている、宮古島関連の記述について抜粋を行った。

①誠 114 飛行隊

a. p437 第八飛行師団命令

4.　誠 114 飛行隊は本一日 1600 桃園出発、第六頂部隊の誘導に依り宮古飛行場に前進し第九飛行団長の指揮下に入るへし

5.　第九飛行団(新たに誠第 114 飛行隊配属)は明二日払暁飛行第 105 戦隊の攻撃隊及び誠第 114 飛行隊を基幹とする部隊を以て沖縄(中)飛行場西方洋上の敵大型輸送船団を索めて攻撃すへし　攻撃実施の要領は飛行団長に於いて規定すへし

6.　独立飛行第 49 中隊は 2 機を以て第四項部隊の宮古への前進ならびに攻撃の為の誘導に任すへし　攻撃の為の誘導に就いては第九飛行団長の区処を受くへし

・ p 438

第九飛行師団揮下独立飛行第 41 中隊の軍偵爆撃機 4 機は、宮古基地から発進し、中飛行場西方海面の輸送船団を夜間攻撃した。そのうち 1 機は中型輸送船に直撃して中破させ、他の 3 機は巡洋艦または駆逐艦 2 を中破したと報じた。

・ p 441

第八飛行師団　４月２日の払暁攻撃の状況

第八飛行師団では、先の師団命令に基づく一日の軍偵各隊による攻撃に引き続き、二日早朝、飛行第 105 戦隊攻撃隊および誠 114 飛行隊の一部が上陸点付近の敵大型艦船を撃することとなった。石垣飛行場を離陸した飛行第 105 戦隊は離陸時刻が未明であったため、先に離陸した直俺機をあとから離陸した特攻機が発見できず、空中集合できないまま全機、飛行場上空を旋回した。そのうちに不時着したり、着陸衝突したり、飛行場に弾が不時落下したりするなどの事故が起こった。結局、混乱のうちに主力の攻撃は中止なった。ただ直俺機 2 機だけが単独進攻して、中飛行場沖の敵船団を攻撃したが、戦果不明であった。(第八飛行師団戦闘詳報、飛行第 105 戦隊附川上次郎大尉の天号作戦の想) 宮古飛行場から出撃した誠 114 飛行隊も出撃時刻が未明であったための離陸事故等により、大井清三郎伍長だけが出撃した。飛行第 24 戦隊の直俺機 2 機に俺護され沖縄に進攻したが、3 機とも未帰還となり、戦果は不詳であった。(第八飛行師団戦闘詳報、第八飛行師団陣没者名簿)

・ p 441～442

第八飛行師団、二日午後の艦船捜索と薄暮攻撃

4 月 2 日 1440、飛行第十戦隊司偵 1 機は敵後続船団の有無、上陸点の状況および那覇、慶良間、久米島付近の艦船状況捜索の任務をもって出動し、1610、那覇基点 190 度 8 粁の地点において、空母 2、巡洋艦 5 からなる機動部隊を発見し、離脱後、沖縄西海域に大型輸送船 30 を認め、更に慶良間上空に進入した時、小型 10 機が上空で哨戒している

のを発見しているのを発見し、回避しつつ離脱した。(飛行第十戦隊功績書類綴)

一方、払暁攻撃に失敗した第九飛行団長は、誠第 114 飛行隊（長　竹田光興少尉）で薄暮、上陸点付近の輸送船を攻撃することに決め、1100 次のように命令した。

b. 第九飛行団命令

1. 那覇周辺の敵は引続き兵力を増強中なり
2. 飛行団は前項的輸送船団攻撃を続行せんとす
3. 飛行第 24 戦隊長は誠 114 飛行隊を併せ指揮し本二日 1900 を期し前項大型輸送船を索めて攻撃すへし但し飛行第 24 戦隊は爆撃とし誘導及戦果確認は自隊に於て処置するものとす

戦隊長は地上に於て指揮すへし飛行団のこの攻撃は所命のとおり実施され、誠 114 飛行隊長竹田光興少尉ほか 6 機が突入し、戦艦 2、巡洋艦 2 および大型輸送船 1 を撃沈、艦種不詳 1 を大破炎上させたと報じられた。(第八飛行師団戦闘詳報)

②誠 116 飛行隊

・ｐ530

27 日後半夜(28 日)の師団の攻撃は大きな成果を収めた。第九飛行団第 116 飛行隊の五味大磯少尉外特攻 1 機及び独立飛行第 42 中隊の爆撃 1 機は、独立飛行第 41 中隊の軍偵誘導のもとに宮古から出撃、慶良間沖の敵艦戦を攻撃し、中型輸送船 1 を撃沈、巡洋艦 1 、輸送船 1 を大破させたと報じた。損害は特攻 2 機であった。

陸軍中飛行場は、特攻隊の燃料補給や整備の為の中継地としての役割があった。陸軍中飛行場からの特攻隊出撃は 2 回、誠第 114 飛行隊と誠第 116 飛行隊で、不帰の兵隊は 10 人（知覧特攻平和会館の資料による)、最年少 17 歳～26 歳までの若者であった。日中、激しい爆撃を受け、穴だらけになった滑走路の修復は、夜を徹しての作業となり、山砲兵第 28 連隊をはじめ戦車第 27 連隊第 3 中隊や特設警備隊第 210 中隊、輜重兵第 28 連隊等、其の他多くの住民も駆り出され、翌日には飛行機の飛来を可能にしたとのことである。陸軍中飛行場に近接する野原の住民の体験談では、空港に飛来した特攻隊員の慰問に駆り出されたとの証言もあるが、陸軍中飛行場を中継として特攻に出撃した部隊は、誠第 114 飛行隊と誠第 116 飛行隊の 2 部隊の資料のみである。然しながら、海軍飛行場と同様に中継地としての使用やトラブル等で飛来した可能性は否定できない。

3. その他の飛行場関連資料

・天一号作戦戦闘（自 3 月 26 日至 6 月 20 日）中は　敵機動部隊沖縄方面に来襲するや宮古島に対する敵機の来襲は益々苛烈となり、本作戦に於ける特攻機の基地たる宮古陸軍飛行

場の防衛の強化を命ぜられ　連隊は山砲の全力を以て同周辺地区に展開し連日来襲せる敵機に対して適時有効なる射弾を送り敵の飛行場攻撃を著しく制限す。

国立アジア歴史資料センターRef. C11110237800　戦史資料山砲兵第28連隊

・海軍は棚町整大佐麾下の南西諸島航空隊の一部が宮古、石垣に派遣され、陸軍は在台湾第八飛行師団麾下の第9飛行団(柳本栄喜大佐)に属する特攻隊が宮古島の各基地に次の如く展開した。

第24飛行機戦隊(戦闘機10機)

独立飛行第41中隊(偵察機10機)

誠第115飛行隊(特攻機10機)…石垣飛行場

誠第116飛行隊(特攻機10機)

誠第114飛行隊…宮古島中飛行場

この他誠第39、40飛行隊(特攻機合計20機)が宮古島に配備されることになっていたが、実施されず。

先島群島作戦(宮古篇)…p14　航空部隊の展開より抜粋

・昭和20年3月23日早朝米艦載機の大群は慶良間進攻作戦に呼応して宮古島に来襲。米軍は沖縄攻略に先立って先島群島からする特攻機の攻撃を事前に制圧するため、同方面の航空基地を徹底破壊に乗り出した。台湾を発進した特攻機のうち、陸軍機は宮古島、海軍機は石垣島飛行場を利用し、夕刻着陸、整備燃料補給し、明け方敵艦船を求めて飛び立った

先島群島作戦(宮古篇)…p27より抜粋

・昭和20年4月1日、米軍は沖縄本島上陸。この日、宮古島の上空は早朝から米機艦載機の大群の攻撃を受ける。米機の主目標は飛行場の滑走路と誘導路及び掩体(土手を築いて中の友軍機を守る)に向けられた。1資料によればこの日来襲した米機の述べ総数は300機。中飛行場対空戦闘部隊は輜重兵第28連隊玉木少佐指揮の下、飛行場周辺の高地及び平地に布陣した機関銃砲及び機関銃がよう撃。

先島群島作戦(宮古篇)…p28より抜粋

・昭和20年4月以降　航空機による特攻作戦に遺憾なきを期すため、昼間空爆でこわされた飛行場の補修工事に全力を挙げる。飛行場大隊と近郊の部隊だけでは能率が上がらず、納見中将は城辺村長間地区に布陣していた戦車第27連隊第3中隊(渡辺晃米大尉)の出勤を命じ、戦車改造ブルトーザーを修復作業に投入。

先島群島作戦(宮古篇)…p29より抜粋

・昭和20年4月22日　友軍機の掩護の下に白昼飛行場の補修作業。10数機の特攻機が滑走路に並んで発進体制のところに突然の敵機の一隊の来襲あり。敵機の攻撃をかいくぐり、

数人の将校と下士官が滑走路付近に並んでいる友軍機を掩体めがけて押し出した。特設警備隊第 210 中隊の池原中尉、輜重兵第 28 連隊の将校、下士官 3 人であった。
先島群島作戦（宮古篇）…

4. まとめ

本稿では、国立アジア歴史資料センターに公開されている航空隊に関する戦史資料を中心としながら､海軍飛行場と陸軍中飛行場の利用状況について整理した｡これらの資料からは、これまでにいわれているように各飛行場が敵の空襲の対象にされることが多かったことがみてとれる。また、海軍、陸軍ともに台湾を拠点とする航空隊の中継地や特攻の出撃地として利用されていた状況が詳細にわかってきたといえる。本稿では、主に旧日本軍から各飛行場の利用状況について整理したが、飛行場建設のために土地を強制接収された島民や建設工事に従事した当時の状況についてふれることができなかった。この点は、今回のテーマを考える上で表裏一体の課題であることはいうまでもない。今後、この支店から再度本テーマについてアプローチを行っていきたい。

末尾となりましたが、本稿をまとめるにあたり、宮古郷土史研究会十一月定例会で報告を行い多くのご教示をいただきました。記して感謝いたします。

【注釈】

注 1.陸軍東飛行場の構築も考えられ、測量まで行ったものの構築にはいたらなかった。

注 2.「山砲兵第 28 聯隊戦史資料」(ref.C11110237800、ref.C11110237900)によれば、短二十糎榴弾砲 2 門を設置したと記されている。

注 3.二式高練とは、二式高等練習機を示す。

注 4.一式戦闘機の通称は隼。

〈参考文献〉

・沖縄県立埋蔵文化センター　2005 年『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（V）―宮古諸島編―』沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書第 30 集
・瀬名波栄　1966 年『宮古島戦記』宮古島戦記刊行会
・瀬名波栄　1975 年『先島群島作戦(宮古編)』身小島戦記刊行会
・下地和宏　2017 年「三つの飛行場はどのように利用されたのか」『会報』NO.218　宮古郷土史研究会